

# 論文内容の要旨

申請者氏名 藤吉 晴美

---

論文題目 自閉症スペクトラム障害の早期発見・支援に関する研究  
— 4 か月児健診でのスクリーニングとその後の支援 —

## 緒言

乳児健診や育児相談の場で、育児困難・不安を訴える親の乳児達と関わりを続けていた筆者は、生理学的な問題がないのに、背中を反らせたり、両脚をピンと突っ張らせている乳児がいることに気づいた。筆者はこれを乳児の「動作」の問題として注目し、4 か月乳児の動作に視点をあてて、赤ちゃん動作法を実施し、乳児への心理支援を行った。その結果、半数以上は育児困難などの問題が解決したが、赤ちゃん動作法を実施しても動作問題の改善の乏しい乳児がおり、この群では、乳児自身に発達・適応上の問題があるケースが多くみられた。

動作法による働きかけに背や腕を硬くして抵抗し、容易にはからだを変化させようとする傾向は、長年の自閉症スペクトラム障害（以下 ASD）の動作訓練の研究報告で、数多く取り上げられてきている。からだを硬くして抵抗するということは、他者からの働きかけを受け容れがたいということであり、それは対人対応上の問題を示唆している。この問題は ASD の中核症状としてのコンセンサスを得ているが、研究対象は年長児以降のものばかりで、乳児の動作に注目した対人対応の研究は筆者が渉猟した限りでは皆無であった。

ASD の早期発見に関する研究では、その初期徴候把握において、指さしの出現や言語でのやりとりといった高次の社会的行動に視点を置いた研究が主流であり、1 歳 6 か月健診が起点であった。しかし 1 歳 6 か月では、すでに ASD の重要な特徴が顕在化しており、ここに至るまでの ASD 育児の困難性を考えると、乳児期早期のスクリーニングが必要と思われた。さらに、我が国の 1 歳 6 か月でのスクリーニングは、親記入式のチェックリストを用いている。親による記入データは、親の情緒的なバイアスの影響が払拭できず余剰誤差も入りやすい。そこで近年では、研究者自らが乳児を直接観察し、追跡調査するという前方視的研究が主流で、ASD の乳児期指標を、運動発達の遅れや歪みから特定しようとするものと、コミュニケーションや対人関係の問題を示唆するであろう乳児の注視行動に焦点をあてるという 2 大潮流がある。しかしながら、運動発達については、指標として有用とされる徴候は多数挙げられているものの、見解の一致はみられていない。一方の注視行動研究においては、肯定的データでも、徴候把握の最短は 6 か月であり、乳児期初期には、その有効性がほとんど認められていない。

以上の観点から、本研究では、乳児期の動作の問題の解明を通して、ASD の早期発見が可能になるのではないかとという研究仮説の検証を行った。乳児の動作を介して、ASD の中核的障害である対人相互反応の問題を把握しようとする研究は、現在まで行われていない。本研究は、専門家による客観的評価で親の評価によるバイアスの問題を払拭し、4 か月と

いう乳児期前期の児に対して適用可能である。つまり先行研究の問題点をクリアできる新たな取り組みであると思われる。

## 研究 I

4 か月健診での乳児の問題動作と 3 歳健診での ASD との関連性の検討を目的として、N 市において 30 名の標本調査を行った。4 か月健診での動作テストで、次の 3 群を抽出した。A 群は、動作問題が検出されなかった群、B 群は、動作問題が検出され、介入によって改善した群、C 群は、動作問題が検出され、介入によって改善しにくい群である。3 歳健診において、C 群は A 群に比べ、ASD 児と診断された割合が高かった。また C 群は B 群に比べ、ASD と診断される割合が高い傾向がみられた。この結果から、ASD 早期スクリーニング方法としての動作テストの有効性が示唆された。また C 群の母親は、他群に比べ、5 か月から 7 か月にかけて育児支援をより多く求めていることも判明した。

## 研究 II

研究 I は標本調査であり、対象者数も少なかったため、N 市において、一定期間における 4 か月健診受診者を対象とした全数調査を実施した。4 か月健診受診者 134 名のうち、要件を満たした 82 名を対象として、4 か月健診時の動作テストで、問題動作があった群と問題動作がなかった群の 3 歳健診での ASD 数の差異を検討した。その結果、問題動作が検出されなかった群には、ASD が皆無であったのに対し、問題動作が検出された群では ASD が約 28% 含まれ、2 群間での ASD 数に統計的な有意差が認められた。スクリーニングテストとしての能力では、感度は 100% で、ASD 児は 4 か月の動作テストで全員に問題があった。陰性反応適中率は、100% で、動作テストで問題動作なしとされた場合、ASD は存在しなかった。しかし、特異度は 50%、陽性反応適中率は 27.6% であり、4 か月の動作テストで問題があっても、定型発達の可能性は高いことがわかった。

この結果から、動作テストで問題動作が検出された群については、より丁寧な育児支援をこころがけることの必要性が示された。

## 事例検討（ASD の早期支援のための動作の活用）

育児支援の主軸である乳幼児健診における親子への育児支援の実施状況は、1 歳 6 か月以降がスタンダードであった。ASD は、生来の対人対応の問題があり、さらに睡眠や食事にも問題がある児や、運動発達の遅れや偏りといった問題もあわせもつ児も多くいる。親への育児支援が必要な際、いつでも対応できるよう、乳児期から育児支援の体制を整える取り組みは急務である。そこで、N 市での動作を活用した 4 か月からの育児支援の実際について、ASD の 3 事例を検討した。

3 事例は、いずれも動作テストで問題動作が検出されており、事例 1 は母親から育児困難が語られたが、事例 2 と事例 3 は、母親からの積極的な訴えがなかった。しかし 3 事例ではさまざまな育児上の困難が、3 歳まで途切れることなく生じていた。これらを支援者が集団健診という騒然とした中においても察知できたのは、動作テストの結果を踏まえた丁寧な関わりによるところが大きいと考えた。また、その後の赤ちゃん動作法による支援を通して、事例 1 と事例 2 の母親は、我が子が大人の働きかけを拒否したり、受け容れた

りする様について、からだの実感を通して体験していった。動作に視点をあてた育児支援は、親子の心理的関わりについて、直接的に実感させる機会となっていた。

また 3 事例のうち、事例 1 と事例 2 は、N 市が準備した育児支援を有効に活用しており、頻繁に親子が支援の場へ足を運び、関わり方のヒントを得ていって、いずれの事例とも、3 歳健診では、対人対応の資質の伸びが確認できた。一方、公的育児支援の利用に消極的な事例 3 では、対人対応の力が事例 1 と事例 2 に比べ伸びていなかった。3 事例の比較検討から、ASD の基本的問題である対人対応については、乳児期から、赤ちゃん動作法をはじめとして、育児支援の専門家が意図的、積極的に関わることによって、ASD 児がもっている資質が伸び、適応的な方向へ改善していく可能性が高まると考えられた。

### 総合考察

研究 I の結果から、4 か月健診時の動作テストで、現状への固執性の強さ、変化することへの抵抗といった ASD の中核症状を把握できることが示された。また、ASD が多く含まれる群の母親が 5 か月から 7 か月にかけて育児支援を他群よりも頻回に利用していた結果は、乳児期からの丁寧なフォローアップ体制の整備が不可欠であることを示唆していると考えられた。

研究 II の結果から、4 か月健診時の動作テストによるスクリーニングは、配慮が必要な乳児を全てピックアップできると判明した。したがって、動作テストによるスクリーニングは、見落としによるフォローの未実行をほぼ完全に防ぎ得ると推測した。

ASD の乳児期からの発見・支援への取り組みが展開していない現状については、育児にまつわる親からの訴えを、聴き取りやアンケートに依存して受け身的に待つだけの現在のあり方や、距離をおいた親子の観察といった育児支援方針に問題があると思われ、動作に視点をあてて支援者が直接関わっていくことで、配慮が必要な親子の把握と支援の展開が可能になると考えている。4 か月児の心理は、動作の視点なしでは把握するすべはないにも関わらず、だれひとり着目してこなかったことが、乳児期への育児支援の不活発化を招いてきたのではないだろうか。また、乳児への動作による介入は、育児支援者側に有用なだけでなく、親の乳児へのコミュニケーションの力を培うことにもつながる可能性があり、育児支援における動作の幅広い活用についての研究継続の必要性があると思われる。

### 発表論文：

藤吉晴美(2012). 乳幼児健診における心理支援—福岡県直方市における 4 か月乳児への心理支援. 臨床心理学, **12**(3), 329-336.

藤吉晴美(2014). 自閉症スペクトラム障害の早期発見指標としての動作テストの有効性—4 か月健診の追跡調査を通して. 臨床心理学, **15**(6), 772-783.

## 審査結果の要旨

乳児検診や育児相談は、概ね養育者となる母親にとって、養育・育児のガイドラインを得る貴重な場である。本論文は、そのような乳児検診における乳児の「動作」に着目し、生後4ヶ月といたって極めて早期の段階で自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder : ASD) のスクリーニングに「動作」テスト (①脚、②股関節、③足首、④腕、⑤手指、⑥背肩、それぞれの身体部位への検査者の誘導的働きかけに対して乳児が抵抗的応答をするか否かの査定) を適用することによって、ADS の早期発見が可能となることを明らかにした発達障害の査定上、新規性の高い所見を提供している。

論文構成は、研究Ⅰ、研究Ⅱ、3例の事例研究から成っている。研究Ⅰでは、4ヶ月乳児の「動作」テストが ASD のスクリーニングに有効であることを実証するために、30名のサンプルを A 群 (生後4ヶ月の問題動作なしの10名)、B 群 (生後4ヶ月で問題動作を検出、生後5ヶ月、7ヶ月で問題動作の改善ありの10名)、C 群 (生後4ヶ月で問題動作を検出、生後5ヶ月、7ヶ月でも問題動作の改善なしの10名) に分類し、3歳児検診時における発達適応上の8評価項目の基準をクリアするか否か、を3群間で比較し、C 群は有意に ASD 児と診断される割合が高いことを見出した。

研究Ⅱでは、N市における一定期間内の4ヶ月乳児検診児の全数調査 (N=82、このうち発達遅滞の10名と反応性愛着障害22名を除く50名が対象) を行い、3歳児検診時点での「動作」テストにおける問題動作が検出された群(29名)における ASD 児の数(8名)の割合と問題動作が検出されなかった群(21名)における ASD 児の数(0名)の割合の間の有意差を確証した。この「動作」テストのスクリーニングテストとしての能力指標は、感度が100% (ASD 児(8名)は全員が「動作」に問題あり)、陰性的中率が100% (「動作」テストで問題なしの乳児(21名)はすべて健常発達) であったが、特異度50% (健常発達乳児(42名)のうち「動作」テストで問題ありの乳児(21)は50%)、陽性的中率は27.6% (「動作」テストで問題ありの乳児(29名)のうち ASD(8名)は27.6%) であった。そのため「動作」に問題のある3ヶ月乳児については一層丁寧な育児支援の必要性を説いている。

本論文は、長期の乳児検診 (4ヶ月、5ヶ月、7ヶ月、1歳6ヶ月、3歳) に携わってきた実践経験をふまえて、「動作」テストが新たに ASD のスクリーニングに有効であることを示唆している。ただ、学位請求論文としては人文科学的背景にある心身関係論及び発達心理学や臨床心理学の中での本研究の「立ち位置」が総合的に論述されていないこと、「動作」テストにおける動作の問題 (行動異常) と ASD の質的特徴 (対人関係の構築、コミュニケーション、言語の発達等の障害) の関係に考察が加えられていない点で、ややもの足りない。

しかしながら、コミュニケーションや対人関係構築の基礎となる乳児の視線や注視兆候を ASD の早期発見に適用しようとする研究においては、ASD の兆候把握が最短で生後6ヶ月であるのに比べて、本研究は言語表出のできない4ヶ月乳児への「動作」テストに着目して ASD の早期発見に新たな道を開拓しつつあるという点で価値があろう。